

グラビア	地域を支える人 出蔵健至さん・福井県福井市	1
発掘!地域の希望のタネ	〈焼津魚河岸シャツ〉 静岡県焼津市	5
給食のじかん	〈阿波尾鶏のすだちソース〉 徳島県阿南市	上田千寿 6
書評	たじまゆきひこ 著『なきむしせいとく』	菅原敏夫 8
焦点	札幌市動物園条例から動物園を捉え直す	佐渡友陽一 10

特集

孤独・孤立問題に向き合う

孤独・孤立問題の背景と政策対応	石田光規	16
ゼロ次予防で孤独・孤立をなくす —ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）からの視点	稲葉陽二	23
孤独対策先進国・イギリスの取り組み	多賀幹子	34
孤独・孤立が自殺へと結びつく前に —いのちを支える自殺対策推進センターの自治体支援	森口 和	43
コロナ禍の女性の孤独・孤立に寄り添う —「女性による女性のための相談会」の取り組み	塩田 彩	50
ひとり親家庭の孤立をアウトリーチ型で支援 —特定非営利活動法人ぱんだのしっぽの活動	小川達也	56

各県自治研活動レポート	自然災害に対する取り組み —熊本県本部	大川高司	62
連載	静岡自治研だもんで! ④ コンテンツツーリズムによる地域振興	市川美奈子	64
第1分科会	自治研入門!来たれ、地域の新たな主役!	齋藤富士雄	66
第2分科会	アニメ・マンガなどのコンテンツを活用し地域を元気に!	柳生貴史	
第3分科会	高齢者に優しい各自治体・地域の取り組み	宮脇拓也	
第4分科会	多様性が尊重される社会にむけて	戎 剛	
第5分科会	コロナ禍での平和運動の進め方	西尾祥之	
	自治体の雑誌案内		71
	次号予告・編集部から		72



『なきむしせいとく——沖縄戦にまきこまれた少年の物語』 童心社 一七六〇円
たじまゆきひこ 著
ヨンニッパー

書評子が高校生だった頃、新学期が始まってすぐの四月二十八日は大事な日だった。サンフランシスコ講和条約発効（一九五二年）の日ではあるが、在日の人たちの国籍剥奪、沖縄をアメリカの施政権下に売り渡した日でもあった。沖縄（反

戦）デーと呼ばれていた。二〇一三年、時の安倍内閣のもとで、事もあろうにこの日を「主権回復の日」とする閣議決定がなされた。沖縄の主権が失われた日なのに。この政権とは到底和解できないなと感じた。沖縄では「屈辱の日」と呼ばれる。

一九七二年五月一日、沖縄が復帰する。とりあえずは回復なのだが、そこから本土側が沖縄を消費し、利用する体制が確立する。基地負担はさらに増す。復帰は問題の解決にはならなかった。

五月一日、六月三日

そして六月三日の「慰霊の日」を迎える。本稿をその日の前にして書いている。今年四月、絵本作家田島征彦が本書を出版した。「沖縄戦を描く」というのは、困難な仕事だ。悲惨な戦争を子どもたちに見せて怖がらせる絵本を創るのではない。「平和の大切さを伝えるために。」

主人公は、なかませいとく。国民学校

の二年生だ。いつも泣いてばかりいるので、みんなから「なちぶー」と呼ばれている。四五年三月、アメリカ軍が沖縄に上陸する。戦闘でアンマー（母）を亡くす。妹とはぐれる。自分も左手を失う。せいとくは泣かない

「六月二十三日、日本軍の一番えらい人がおなかをきったんだそうです。アンマーをまもつてくれず、沖縄をまもろうとしなかったえらい人が、じぶんからおなかをきったことがぼくにはふしぎでした。」美談のかけらもない。

「いまはアメリカに、占領されています。でも、沖縄が日本にもどつたら、こんなものは、すぐになくしてしまうさあ。だって、戦争のくるしみを一番知っているのは、ぼくたちなんだから。」これが結びの文章だ。なきむしせいとくはもう泣かない。子どもたちはその理由を想像して本書を閉じるだろう。

評者 菅原敏夫 本誌編集委員

